

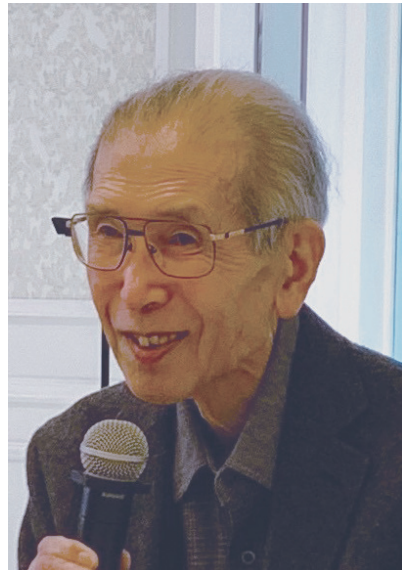


Title	中村宣一郎先生を偲ぶ
Author(s)	高尾, 裕二
Citation	大阪大学経済学. 2025, 75(1・2), p. 53-54
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102771
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



中村宣一郎先生を偲ぶ

本学名誉教授中村宣一郎先生は、2025（令和7）年3月20日にご逝去された。享年94歳である。少し体調を崩され「腰が痛い」と仰ってから1カ月も経たないことであった、と三和子奥様からお聞きした。背筋がピンと伸び、物静かで、穏やかな笑顔を常に絶やさない生前のお人柄そのままのやすらかなお旅立ちだ、と思った。

先生は、1932年に京都府にお生まれになり、1951年4月大阪外国語大学イスパニア語学科に入学された。ご卒業後一旦、社会人になられるも、時を経ず、1956年4月大阪大学経済学部に進学され、引き続き、経済学研究科修士課程にご進学、1965年3月大阪大学大学院経済学研究科博士課程単位修得で退学され、同年4月に甲南大学経営学部講師に着任された、1967年4月に同大学助教授、同大学教授（1973年4月）を経て、1982年4月に大阪大学経済学部教授に就任された。1996年3月に定年ご退官後も、摂南大学経営情報学部教授（2003年3月まで）、金沢学院大学経営情報学部教授（2009年3月まで）として引き続き教鞭をとられた。

甲南大学時代には、着任して間もなく渡仏、フランス政府専門職給費生として国家会計審議会会長であったロゼール（Pierre Lauzel）教授の指導を受けられ、1977年6月に経済学博士（大阪大学）の学位を取得されている。大阪大学時代には1986年4月から1988年3月まで大阪大学評議員を、また摂南大学時代の大半は学科長・学部長の管理職を、務められた。

先生は、今なお新鮮な数多くの著作を会計学界に残された（以下で取り上げる著作の他に、テキストである『会計学』（初版1979年、三訂版1994年）がある）。「一つのテーマを決め、テーマの構成内容をどのように各章に配置するかプランを練り、資料を渉猟し、順序を問わず、各章をコツコツ一つの論文に仕上げていくと、一冊の本が自然に出来上がってしまうんだよ」と、あたかも書生のように少し恥ずかし気に語っておられた先生のお顔が今は懐かしい。先生のご業績は、英語、フランス語、スペイン語—といった語学の才とその才に裏づけられ養われ

た国際人としての社会に対する鋭い洞察を柱とするものである。後者については、先生ご自身「語学は1～2年で集中的にやって、その後その背後にある社会の制度・構造や機能といったものを勉強しないといけないなと思いました」（「中村宣一郎名誉教授に聞く一大阪大学の思い出―」『大阪大学経済学』2015, 64(4), pp.126-137）と語っておられる。

このような背景から、先生は、会計研究者として二つのお顔をお持ちになる。その一つは、フランス会計研究の第一人者としてのお顔である。先生は、当時、わが国において注目されることがなかったフランス会計関連の文献を渉猟し、純粹会計理論、社会会計論などフランス固有の優れた理論を見出すとともにフランス独自の会計原則であるプラン・コンタブル・ジェネラルに注目した。その成果は、『会計標準化の展開』（1965年）、『近代フランス会計学』（1969年）として結実し、さらに、フランス会計学に固有の視点ともいえるミクロ企業財務データとマクロ国民経済計算データの統合を試みた『会計統一化政策』（1976年）は、先生の学位取得論文となり、その後、わが国において関心を集めることになる「会計政策論」の先駆けとなった著作として知られる。

もう一つのお顔は、会計学（財務会計）といえば「企業会計原則」を中心とした会計基準の解釈論を意味した時代にあって、いち早く「経済学ベースの会計学」の一端を切り開こう―という、経済学に関心を寄せ、経済学に精通する会計研究者というお顔である。先生の「経済学ベースの会計学」は、具体的には、経済学的所得概念を詳細に理解・分析され、会計システムのもとで算定される会計利益と経済学的所得概念とを比較し、会計利益の問題点の指摘と改善策の提示という形で展開される。その成果は、『企業利潤論序説』（1973年、昭和49年度日本会計研究学会太田賞受賞）、『利益計算論』（1984年）とし公刊されるに至った。加えて、「規制の経済学」の成果を踏まえ、先生の各国の会計制度と経済学の豊かな知識を背景に、制度会計の根幹に横たわる課題を取り扱った『会計規制』（1992年）がある。

（共著のテキスト3冊を除き）『会計規制』が先生の最後のご著作になったが、色あせないテーマと鋭い分析から、半世紀の歳月が経過し、その間、会計制度を取り巻く環境が激変し、わが国会計学の著しい展開がみられたとはいえ、今なお、いずれもがその輝きを失わない。

教育者としての先生のお顔は、教え子の行く末を、わが子のように常々気遣われる様子のお顔である。先生のそのようなお人柄のゆえか、先生の豊かな学識と国際経験のゆえか、聞き上手で気の利いた楽しい会話のゆえか、教え子からは仕事のことも含めいつまでも慕われ頼りにされる存在であった。筆者も含め、各世代・各分野の多くの教え子との交流は、お亡くなりになるまで途切れることはなかった。

中村先生！ 先生がいち早く注目された「経済学ベースの会計学」という視角は、大阪大学会計学に脈々と受け継がれています。本当にありがとうございました。

（高尾 裕二 大阪大学名誉教授）